

## 『ジョン・ダン入門』

### ——背教と野心の詩人——

ジョン・ケアリ 著  
朝倉秀之 訳

#### 第8章 理性の危機

この章ではダンが理性をどう見ているかを考えてみよう。これは検討するに値する。というのも、推論する力が明らかにダンの詩を特徴づける一要素となっているからである。ダンにはJ・B・リーシュマンの言葉を借りれば「論客の詩人」である。しかし、そのレッテルを貼ったとたん間違った方向に向かう。ダンを一度も読んだことのない人なら、そのレッテルですっかり間違った印象を持ってしまうことになる。論客の詩人なら、証拠を並べ、結論を導き出す人ではないかと思ひ込んでしまう。ダンはそのようなことはない。ダンの議論は、軽くて不明瞭、相互に自己矛盾を起こしていることもあって、決して本物の議論ではないと言っても過言ではない。ダンは、真実の発見の道具としてではなく、韻律とか頭韻のような柔軟性に富んだ詩的付属物として議論を扱っている。それが世間の関心と呼ぶ一面であり、その面を通してダンは自分の詩的自我の欲望と気紛れとを生き生きと描き出している。私たちはダンがでっち上げる論拠の方向をダン自身が変えたり非難しているのを発見しても決して驚かない。例えば『女の貞操』を見てみよう。

愚かなお馬鹿さん、そんな言い訳なんか  
ぼくがやろうと思えば、論破し反駁できる。①

ダンが私たちに印象づける議論は、その意志を通すことにある。論理学は本能的欲望を満たす便利で融通のきくフィルターなのである。十分な動機があれば、ダンはどうな立場の内側からでも外側からでも自分が理論づけをしてしまう。

ダンの詩の中で理論づけるのに振り当てられる不確かで暫定的な役割は、大抵の場合ダンの個人的な精神の発達にせいにされることになる。そしてこのことは、ダンがカトリックの信仰を捨てて、カトリック信仰が勇気づけた論理的な確信からも逃げ出すことで順次決定された。しかしながら、ダンの個人の歴史は、この点では筆者が示そうとするようにヨーロッパ思想の発達をさらに簡潔に凝縮させた複製に過ぎなかったのである。ダンが芸術家として幸運だったのは（そのことでダンが一人の人間としてはかなりの苦痛を背負い込んだことは疑いのないことではあるが）ダン自身の鋭い感性の内側で懷疑主義というあの衝撃を経験したことである。その懷疑主義によって半世紀の間に西欧世界の知的方向が変わることになる。ダンの詩で奇妙なのは、その中で議論したいという執拗な情熱があるのに、はつきりと軽蔑を込めて議論を扱っていることである。この意味で詩が激しく分裂病的になっている。そのことは、一人の詩人から私たちが十分に推測できることである。その詩人の幼年

時代に培った推論する習慣は、家庭教師たちに教え込まれ最も基本的な信仰で織り込まれていたから、大人になった時に際限のない懷疑という壊滅的で解放的な起爆剤に接触してしまったのである。

ダンの時代でカトリック教の支配するヨーロッパの偉大な知的宣言書と言え、まだアキナスの『神学大全』であった。神、並びに神と人間との関係についての体系的考察であり、その著者が一二七四年に亡くなる以前には完成することができなかったものである。

アキナスは、他の中世の思想家たちのように人間の精神は現実を知ることができ、それを自明のこととしている。事実、人間の理性を超えて存在するキリストの受肉とかキリストの贖罪のようなキリスト教の秘跡があることを認めている。しかし、変わらない仮説は神の精神と創造の働きが人間的に理解できることである。宇宙の最高の造物主で、同時に原動者である神は英知である、と『神学大全』の初めで宣言している。従って、人間の自然の理性は、敬虔な信仰に背いて進むのではなく、それを支え解き明かすのである。アキナスは確固たる合理主義をアリストテレスから論理的に導き出している。アリストテレスは確かに同じように私たちが対象の中で知る本質はその他の対象の中に本当に存在するとか、それ故に私たちがその対象から宇宙の信頼に足る姿を作り上げることができると結論づけてきた。

アリストテレスとアキナスの基礎となっている教義は、十六世紀の最後でもっと革命的で反アリストテレスの精神ともいえるものにさえ申し分なく引き継がれているように思える。哲学界の異端児ピエール・ラメは、その死が聖バーソロミューの日の虐殺（マールロウの『パリの虐殺』）の一五七二年で大いにプロテスタント系のヨーロッパでは名声を高めたが、論理学の体系を深いものにした。宇宙に単純な秩序と合理性を押しつけ、表で計算した図表の力を借りて絶対的な真理に人間を到達

させることができた。<sup>(2)</sup> 同じ種類の知的無垢によって、ダンの友人チャーベリのハーバート卿は奮い立って『真理について』の中で自分の理性を活用するだけで人間が敬虔な信仰の持っている普遍的で論争の余地のない要素を発見することができる、と論ずることができた。ダン自身アキナスに対する称賛と愛着を持っていることは、疑問の余地はない。ダンアキナスといえ、『神学論集』の中で神の道具としてのアウグスティヌスを連想し、説教集の中でアキナスを基準として一貫して引用している。

しかし、この熱烈な合理性に反対してルネサンスの人々は古代ギリシヤ哲学者エリスのピュロンから生まれたさらに破壊的な思想の流れの再流行を見ていた。ピュロンの哲学は、その弟子のエムピリクスが記録したように、あらゆる事柄に対しての完全な判断中止を内包していた。ピュロンが指摘したように、私たちの五感は絶対的な確実性は持っていない。様々の動物や鳥は明白に人間とは違った仕方でものを知覚する。本当にその通りらしい。私たちの知識の基礎となつていゝものが確かではないから、何も知ることはできない。私たちが述べる記述一つ一つに対しての反論は同じ理由で押し進められるかもしれないことを認めなければならぬ。一五六二年のエムピリクスの『ピュロン哲学の描写』というエティエンヌのラテン語からの翻訳は、ヨーロッパの精神の成長の中の金字塔であった。しかし、ピュロン哲学が人気を博す前でも、懐疑的な考えは流布し始めていた。ドイツ人ニコラウス・クザーヌスは多忙な教会側外交官でブリクソンの枢機卿であったが、『無知の知』という大いに分かりやすい著書を一四四〇年に完成した。膨大な幾何学の図像をイメージすることで三位一体に取り組もうとしているが、その著書はさらに明快な瞬間に絶対的な真理が人間の把握できることを超えていて、事実、絶対的な真理について私たちが知りうる全てであるという根

本原理を押し進めている。<sup>③</sup>

この考えはもう一人のドイツ人ヘンリー・コルネリウス・アグリッパの懐疑的な論文の核になった。彼の『不確実で虚栄の科学と理論』は一五三一年のアントワープで出版された。彼は軍人、医者、魔術師、スパイだった。プロの著述家ではないが、おそらく、それだからこそ彼の著作は極端に人気がでたのである。一五六八年にジェイムズ・サンフォードが英語に翻訳し、それからヨーロッパの言語に翻訳されていった。知的に努力し告発する中で、その本は売春と売春周旋とに関する冗長な章と修道院の階位を持つ人々のかんりの中傷を組み込もうとしている。聖職者たちに対してアグリッパは終生の恨みを心底抱いていたからである。彼の主要な論点は、一貫して繰り返されるが、真理は「どんな人間の理性の論理的思考力によっても」理解されることはないし、どんな種類の知識も明らかに当てにならないばかりか、神の誇りと恥辱を誘発して害を及ぼすだけである、というものである。彼は農業から修辞学まであらゆる学問の分野を攻撃する。特にアキナスのようなスコラ哲学の神学者たちを批判している。聖なる事柄を論理学や人間理解の程度まで引き下ろそうとしているからである。

実際のところ、アグリッパは真正正銘の懐疑主義者というよりも、多くのアウトサイダーのように既成の職業や既成の建物を嫌悪することに生き甲斐を感じる嫉妬深い自由人である。憤慨が激しくなると、アグリッパは自分の懐疑主義についてもすっかり忘れてしまうことがある。このように異端審問にも不平をもらす。もしも告発された人が理性を持って裁判の前で自分自身を正統化しようとする、審問官たちは鉄の棒や火を見せたりして、異端者は有罪になることがあるので、議論で有罪になるのではないと反論したりする。論文の最後の部分での理性性に対するの猛攻撃する機会が与えられて、アグリッパは論理的には審問官たち

の行動を称賛すべきであり、彼らの信仰については主張させ、理性を退かせることが、正にアグリッパ自身の主張である。その代わり、混乱していたことに気づいていないようにみえ、審問官についてわき道にそれた後、まるで何事もなかったかのように人間の燃え上がる理性を厳しく非難し続ける。<sup>④</sup>

この欠点にも関わらず、ニコラウス・クザーヌスとアグリッパは世間の動向を示していた。エムピリクスの一五六二年版の翻訳が出た後、二人が概観を示した懐疑主義の流れは、より明快でさらに改善された精神によつて進められた。モンテーニュはエムピリクスに敬意を表して鑄造された勲章を持っていて、彼の『レイモンド・セボンのための弁明』はルネサンス期の懐疑主義の最高の要約である。モンテーニュの例はピュロンと同じである。私たちの理性は意味の知識についてだけ機能するの価値はない。私たちには現実に対してこれをチェックする機会はない。「懐疑主義者」のウォルター・ローリー卿は最初の三冊の『ピュロンの素描』の縮小版を売り出し、感覚の印象は信頼できないので、私たちは物事がどのように現れるのかだけを記録出来ると結論つけた。「物事が本当にそうかかどうかわたしには分からない。」<sup>⑤</sup> シドニーの友人フアルク・グレヴィルは知ることは不可能であり、人間の全ての知性は帰するところ虚しいごまかしになると言いふらすために詩で語る「人間の学問についての論文」を作った。ダンの手紙はモンテーニュを一六〇三年か、一六〇四年かに読んでいたことを示している。<sup>⑥</sup> 一六〇一年に書かれた「魂の発展」の最後の数行で明かになっているのだが、とにかくある雰囲気の中でダン自身がすでに懐疑主義者になっていて、全ての価値は相対的で、人間が誇る確かさなどは普通の偏見以上の基盤を持っていないと信じているのである。

単純に良いもの、それ自体で悪いものなどない、  
あらゆる比較するものの中で

唯一の基準は意見であり、判断である。①

文句なしに、この安易な切り捨ては一六〇〇年頃の優れた若者の考え方の間では人気があった。シェイクスピアはハムレットに言わせている。「いいも悪いも本人の考え次第。」「この世の者たちは全て他人の意見から判断するものだ」②とマーストンは『望むこと』の中で述べている。真実を受けて信用しないのは、世紀末の疲労の部分であった。

しかし、私たちは単に流行に乗っているだけであるかのようにダンの懷疑主義を言い繕うことはできない。なぜなら、ダンの生涯を通しての考え方の中に影響を与え続けた有り余るほど十分な証拠があるからである。「証明を除いて、(あるいは、証明はごく少ないのだが)私は見つけるとき、いつも途方に暮れる」とダンは一六一三年の手紙で書いている。「証明」という単語で、ダンはここで数学の証明を言おうとしている。ダンが言おうとしているのは、信用できると考えられる人間の考え方のある部分を探究する内に、やむなく数学の抽象性を使い出してしまったことである。この観点から、ダンはデカルトを先取りしている。デカルトは私たちに『瞑想』の中で語ってくれている。信頼できるものと信頼できないものに対して心の中味を探索しているとき、どのように最終的に到達した三角形を考えついたのかというものである。数学的に見られる三角形は、

自然、形態、本質を含んでいる。三角形は不変で永遠である。わたしが創作したのではないが、少しも私の心に左右されない。このことは三角形の様々の性質を証明することが可能であるという事実

を導き出す。その結果、その三つの内角の和は二直角に等しく、最大の角は最大の長さに対応している、など、どれも私が望もうと望むまいとその三角形の中に非常に明確に証明できるように含まれていることを認識する。たとえ、初めて三角形を思い浮かべるとき、私とその特性を全く考えないとしてもである。その特性はそれゆえに私の創作などできない。③

デカルトはダンより二十四歳ほど若く、一六二八年に出版された彼の『瞑想』はヨーロッパの哲学の変革の火蓋を切って落としたのである。アリストテレスがやってきたような客観印象や感覚印象で始める代わりに、デカルトは概念から具体性を取り去る考え、見えない三角形から始めた。その三角形は、デカルトが感じていたように、永遠で自分の心から独立していなければならぬ。なぜなら、三角形は自分の心が存在していようといまいとその数学的な特性を保っているからである。デカルトよりもっと後のさらに懷疑的な哲学者たちは、これが心地よい幻想であり、三角形のような数学的な概念が意味を意味のない宇宙に移入するために人間の心によって創作されることを論じていた。ニーチェが主張するような数自体の考えは私たちが組み立てた宇宙にのみ応用が効くのである。すなわち「我々の考えではない世界では数の法則は全体に応用が効かない。これらは人間の世界でのみ有効である。」④

ダンは敬虔な信仰によってニーチェ風の地獄から自分自身を救い出した。信仰と理性の間の心の葛藤は私たちが論ずるものである。しかし、ここで指摘するのに値するものは、ダンの一貫した懷疑主義が消すことの出来ない刻印を自分の信仰に残したことであり、人間が到達しようとすることに對して軽蔑することとその懷疑主義を満たしたことである。「我々の知識が全ていかに不完全であることか」とダンは一六二六年の

説教の中で典型的に主張する。

どんな事柄を我々は完全に知っているでしょうか。我々が芸術を考えるのか科学を考えるかを、召使いはその科学の中の知識をご主人たちとの調和によってのみ知るのである。若者は老人の見方を使うことでは自分たちの見方を改めはしない。まだ、我々は自然を見る、ただアリストテレスの見方で、、、。知識は全てむしろ子供のようなものであると言ってもよい。それはミイラを作るために防腐保存処置をされ、人間を作るために授乳されるのだから。⑩

防腐保存処置をした子供のイメージは暴力による威しを意味するのであり、ダンはその威しを用いて人間の権利を引き離すことに余念がない。その威しは(ダンの信仰を非常に特徴的にしているが)理性が無いことに対するダン自身の怒りの表れなのである。不屈の合理性の故に、ダンにはコルネリウス・アグリッパよりも懐疑的な議論にさらに情熱的に関わっている。アグリッパの論文から見ると、その苦痛のイメージが無いなら、ダンの芸術や科学の非難は簡単にしていたかもしれない。

ダンの懐疑主義が生涯にわたり続いていたことは確かなことであるが、いつ始まったのかを言うのは難しい。しかし、すでに『諷刺詩 III』の中に表れているが、おそらくダンが二十一歳の時に書いたものである。そこでは節度のある形式が取れていて、ダンの同時代の人たちの中には好意を示す者もいるし、純然たる古典主義の懐疑主義よりさらに建設的であった。ダンは「賢く疑え」⑪と慎重さが真の知識に導いてくれる

と期待しながら、既成の教義全てを信用しないようにと忠告している。リチャード・ウィットロックは十五世紀の終わりに好ましく思われることで懐疑主義に修正が加えられると⑫、自著『ズートミア』の中に『諷刺詩 III』から「賢く疑え」を引用した。私たちが見てきたように一六〇一年までには、なおさらに一六一一年ダンが『第二周年詩』⑬の中で人間の知識に対する痛烈な攻撃を書くまでには、ダンの懐疑主義は極端で陰鬱なものに発展していった。あるいは、最初からそうだったのかもしれない、というのも懐疑主義というものが悲しい気持ちだけでなくウキウキした気持ちにさせることを覚えておかなければならないからである。ダンは、ほとんど何についても二心を感じることができたから、内なる憂鬱に浸っているほど熱心にその陽気さと困惑を利用したのである。ダンの『逆説』は論拠と理論のつかみどころの無さを露呈している、現実自分に深く関心のあった心変わりや自殺のような主題について陽気そうな見方をとっている。そのようなもので私たちは懐疑主義の解放するような力を感じることができ、懐疑主義を信奉する人たちは確信や熱心さから自由になるのである。本質的に(ただ面白おかしく装うときもあるが)逆説は懐疑主義的な形式であり、懐疑主義と並んでルネサンス期に発達したものであり、一五四三年に出版され、たくさん模倣されたオルテンシオ・ランドウスの『逆説』からの初期の刺激を受けていた。ダンの正式な逆説はこの伝統に属して、その目的の一つは奇妙に執拗な茶番仕立ての力を借りて理性と現実との間の相違に私たちが立ち上がることである。もちろん、ダンの詩はこの無責任とも言える逆説をも奨励している。同じように理屈を負かすために訳の分からぬ不可能を主張するさらに神秘的なものも奨励する。⑭

懐疑主義によってダンはまだ理性が発展させた社会制度に疑いの目を向けるようになった。『制限された愛』は解放された自然主義の観点

から一夫一婦制を批判している。⑥ 動物は雑多な関係で生きているのに、何故人間はだめなのか、確かに、この考えの詩行がオヴィディウスの中に見出されるが、ダンが書いた時代までにはむしろ陳腐なものになつていたのである。特に、新ラテン語で書かれた詩の中に、私たちは大勢の人畜無害な術学者や聖職者たちが模倣しているを発見する。誰も性的に解放されるようになるなど考える人はいなかった。このような自然主義的な反抗に新風を吹き込んだのが、モンテーニュの著作であった。彼は素朴で体系化されない希有なる才能で武装して文明化された世界を概観した。そこで自らを発見し、悲しみに溢れた告発へと向かわせた。メキシコの植民地でのスペイン軍が最近行った残虐行為によつてモンテーニュは文明の身の毛もよだつ面に目覚めさせられることとなつた。『人喰い人種について』というエッセーの中で彼は偏見で西欧の人が野蛮人だと見なしていた民族の人間の礼儀作法の方が優れていることを熱心に主張した。モンテーニュが語るブラジルの人喰い人種は全体的に知的なたしなみに欠けていて、無知で数字が分からないし、法律も貨幣も貿易とか財産もない。しかし、人喰い人種は、自然の美しさや汚れの無さを楽しむ。嘘、欺瞞、反逆罪、偽善、強欲、妬み、非難を意味するこれらの言葉が、彼らの間では知られていない。彼らの社会的秩序は公平であり、文明化された世界の中で獲得する甚だしい貧富の差についての話しを聞くと、彼らはその不正に肝を潰し、なぜ貧乏人が単純に金持ちの喉を掻き切つたり家に火をつけたりしないのかと驚きを表現する。人喰い人種が人を殺したり焼き殺したりする習慣に関して言えば、モンテーニュが指摘しているようにヨーロッパの人たちはそれを批評するのが下手だと認めている。なぜなら、彼らは宗教の名の下に人間を生きたまま焼き殺したりするからである。モンテーニュの懐疑主義の健全さは、弟子を見つづけることができなかつたことである。フランスでヴィオ

ーが指導した自由学派の作家たちは自然の恩恵と不案内をすぐに宣言している。ダンもまたあまりに個性が複雑であつたからどんな哲学にも説得されることはなかつた。しかし、ダンの恋愛詩やエレジーの反抗的な面はモンテーニュを読んだことから確かに刺激を受けていた。

しかしながら、ルネサンスの人にとつて懐疑的な討論の中心にある問題は、理性が受け入れ可能な社会基準を達成できるかではなく、それが神の知恵に到達できるかどうかであつた。私たちが見てきたように、アキナスが提出した答えは、広い意味で肯定的であつた。批評家たちはこの答えがありそうもないことだと指摘するのに時間はかからなかつた。アキナスに反対のジョン・ダンス・スコトウスは、オックスフォードのマートン・カレッジで学んだスコットランド東南部ベリックシア州出身の俊才であり、すぐに自分の講義を携えてパリ大学の人々を感動させたが、神は絶対的知性ではなく、絶対的意志であると宣言したのである。善は、スコトウスが述べたように、いかなる合理的な原理とも一致するから善なのではなく、善は善であるとあっさり神の意志で決めるからというのである。従つて、人間の理性は、神学的に言えば、役に立たない。神の本質は理解することができないし、その存在を証明することもできない。スコトウスの信奉者たちは、唯名論（ラテン語の名前に由来する）という学派を作つた。彼らはアキナスや「現実主義者たち」が自分たちの哲学の基礎を置いていた「真実」とか「人間性」の抽象的な概念や一般概念には現実性がなく単に名前があるだけだと主張したからである。唯名論者たちが論じたように「人間性」のようなものは何もない、ただ個々人が存在するだけである。

スコトウスの知的後継者はいもう一人の英国出身ウィリアム・オツカムであつた。彼はサリー州の村に生まれ、一三四九年の黒死病で死ぬ前にヨーロッパの大学を渡り歩き激しく華々しい経歴を積んだ。成し遂げた

ことの一つに唯名論を一般化したことが挙げられる。彼の教義は実用的で纏まっていた。哲学者たちが論ずる事柄は、彼が教えたように実際に何とも一致しないで、言葉や命題に任意に月並みに附属する単なる意味なのである。私たちが知りたいと望むことができるのは、個人的な目的だけである。真実と誤謬の普遍的な側面は、私たちの知的範囲をかなり越えて存在する。私たちは自分たちが魂を持つていることを理性で証明することさえできない。私たちは信仰の事柄としてそのことを受け入れることができるだけである。同じ事は神の存在についても言える。スコトウスのようにオッカムは神の意志についてかなり強調した。オッカムの神は、理性が必要ではなく、善悪を構成しているものの合理的な評価は彼には関心がないのである。人間が最大の罪と見なすものは「罪に繋がるどんな罪深い状況もなく神によって実行されるかもしれない。」<sup>⑩</sup>

同じく特別な男たちや女たちの神の呪いと救済は全体的に意志の問題であり、それを合理的に説明しようとするのは役に立たない。

振り返ってみると、唯名論が後期ルネサンスに復興の時期を迎えたことは明らかであろう。理性を疑うことは、モンテーニュのような新思想家たちの懐疑的な雰囲気にな手く合うと思われた。彼らは自分たちで理性よりむしろ意志が神の業と同じく人間の業を一番納得のいくように説明しているという結論に到達していたからである。個人的な事柄だけが真実なものを楽しめるといふ考えを押し進めることは、一つの時代に受け入れられるように思われた。当時、カトリック教ヨーロッパは崩壊してしまい、方向はますます個人主義的になっていった。その上、唯名論は神を人間の手の届かないところに置いたので、自然の領域が唯一の研究の正当な対象となってしまう。これが正に十六世紀に最も進歩的な思想が研究されるように動き出したところであった。このような理由を期待はできるが、唯名論が育む反合理的意志が再燃して、ジャン・カル

ヴァンの教えにより時が満ちて強烈で劇的な形になった。

アキナスは人間が神の姿に造られるという聖書の教えに理性を持った神を信仰する基礎を置いてきた。彼はこのことを人間の心と神の心は本質的には同じ仕方で作作用するという意味にとった。それ故に、人間の考える正義や善についての概念はおおよそ神のものである。カルヴァンは全体としてこの概念を神の主権と神秘を縮小してしまうものとして拒絶した。一五三六年に最初に発行された彼の『キリスト教綱要』は、ルネサンス期で群を抜いて最も重要な本として出版された。その本が断定する神はキリスト教がすでに考えついていた最も恐ろしいものであった。カルヴァンが説明する神は、時が始まらない内にある人々には救いを、また他の人々には永遠の滅びを運命づける。この裁判官のような宣告は純粋な意志の行為であって犠牲となる者の功德や他のいかなる分かりやすい原理とも全く釣り合わない。カルヴァンの神は、このように永久に苦しめるといふ明白な目的のために多くの数の人間を創造する。この運命を逃れるために何かできるかといっても何もできないのである。カルヴァンが認めるように人間は理性に関しては神の姿に造られたのは本当である。しかし、人類の墮落があまりにも腐敗していたので、「どんなものが残っているにしても」その姿は「恐ろしいほどに変形している。」<sup>⑪</sup>このように私たちの理性は、自然の秩序について知ることができず、神も神の国も知る術を持つことができない。私たちはこのような事柄に「モグラよりも盲目」<sup>⑫</sup>になっただけである。さらに私たちの自然はアダムの楽園追放の結果として全体的に腐敗して、その腐敗が私たちの存在の全ての部分を通して拡散する。子供たちは邪悪に生まれる。すなわち、その子供たちの全体の性質は罪の種子であり、子供たちは結果として神に対して憎悪に溢れ言語道断である。

カルヴァン主義は人間の条件に固有の罪、怖れ、当惑の感情に強烈に

訴えた。同様に、広く行きわたった忌まわしい死すべきものであるという感覚から救い出してくれた。忌まわしいからこそ諷刺から衛生上の改革に至るあらゆる種類の改善事業に手をつけることができる。人種的あるいは国家の優位性の理論と同じように、そのカルヴァン主義は大多数の人々には拒否されることになっていた莫大で全く受けるに値しない権利と恩恵の繁栄を選ばれた者には約束したのである。教えが一般的に受け入れられたとは言え、救われる者は数にしてほとんどないであろう。

「救われる者は人類のごく僅かな部分に過ぎないことは聖書と経験の中であまりにも明かである」とバクスターは『聖徒の永遠の休息』の中で述べた。ピエール・デュ・ムランは十万人に一人だけが救いの機会を得ていると計算した。<sup>⑩</sup>カルヴァン主義はマルクス主義と比較されてきたし、元来の革命的な熱心さの点で似ていたのであり、その運命主義も自説が正しいことと自説に嫌悪感を持つ範囲においても同じなのである。

ダンは、当時の他のあらゆるプロテスタント信者たちのようにカルヴァン主義に深く影響を受けていたが、アキナスの信奉者でもあった。このことはダンが人間の理性の二つの融和しがたい価値判断の間に捉えられていたことを意味する。価値判断にはそれぞれに長所と短所があった。もしアキナスの見解を取れば、自分自身と自分の力についてもつと高貴に考えることができた。他方、神が苦しむことになった。なぜなら、もし神が本当に理性になるなら、その時神は全知全能ではなくなる。合理主義者の場合をさらに大胆に述べる事によってこの危険性が非常にはつきりとでてくる。例えば、早熟のオランダの天才ヒューゴウ・グロテウスは、七歳で完全にラテン語の詩を創作することができたと言われているが、十二歳で大学に行き、十五歳でカペラの百科事典を編集し、自分自身に同等の合理性を神に要求した。「神ご自身は2を2倍

して4にしないようにすることはできない」とグロテウスは規定して「作法のように神は理性によって、本来悪であるものを悪でないようにすることはできない。」<sup>⑪</sup>グロテウスの神は、明らかにカルヴァンの邪悪で気紛れなサディストよりも安全な提案である。しかし、またより小型になった姿であり、合計を正確にしたり道徳律を守らせたりすることになる。カルヴァン主義には人類を減らしてしまう短所とつまらない勘違いに対する人類の合理的な概念があった。しかし、カルヴァン主義は神に触れずには考えられない無限の主権をしっかりと保持していた。一度私たちはこの方法で二つの理論の賛否両論を分けると、私たちはダンがそれらの間で選択するのがどんなに難しのかを見つけた理由を理解することができる。ダンの利己主義によって、難解で関連した合理性と共にダン自身はスコラ哲学の見解に傾いていった。ダンには自分が忠告を与えることができ、理解できる神を求めていた。しかし、同時に絶対と無限を想像しなければならぬことで、ダン自身のバラバラになった存在を切り抜けることにもなり、強制的にダンにはカルヴァン主義の言う人間が知りえない神へと向かうことになった。

著書の中で私たちはダンが二つの利用できる神の働きの間で行きつ戻りつよろよろしているのを見出す。神は慎み深く理にかなっていると主張することもある。ダンが注意を促しているが「普通の人間になる以上にもつと不快で悪化した自然を」神のせいにしてはいけない、と。そしてダンが賛意を表して聖アウグスティヌスを引用する。「模倣する義務などない神のようなあなた自身を決して考えてはいけない。あなたが神をそんなものだとか、そんなことをするようなものとするなら、神を誤解することになる。調和しているあなたはそうあるべきではないし、あるいはそうすべきでないからである。」<sup>⑫</sup>ここで神の善と人間の善は明らかに同じ種類になる。人間の性質は神の性質の基準となる。し

かしながら、他の場所でダンは直接的にこの喜ばしい信仰に反駁する。

「なんと貧しく、なんと狭く、なんと不信心か、神の基準がこれだとしてたら」ダンは声を大にして言う。「あなたが神なら、あなたがしようとするように神がしなければならぬ、ことになる。」<sup>②</sup>だから神の善

の理解は結局のところ私たちと同じではない。もしも私たちが神であるなら、私たちは神がするように振る舞うべきではない。神は私たちの理性を越えている。すなわち、カルヴァン主義者のいう天空の怪物である。

理性の現状を越えたこのいつ果てるとも知れない内輪もめの闘争は、ダンの作品を通して続いていく。ダンが神は不可解であり、神を不可解であると考えるのは間違いであるとの両方を考えているのを見ることが出来る。<sup>③</sup> 神を扱う際にダンは理解力を使うことができるようにと願っている。「私はヨブの正義を持っていないが、ヨブの欲望を持っている。私は全能の神に話し掛けるであろうし、私は神と論ずるのである。」<sup>④</sup>しかし、ダンが同様に感じるのには、自分の理解がその仕事と同等ではなく、この欠けているものについて神に不平を漏らす。

あなたの代理人なる私の中の理性は、私を守るべきなのに、  
悪魔に捉えられ、弱く不実であることが分かる。<sup>⑤</sup>

この二行は、理性が自由に機能するだけなら、理性によってダンは神の近くに連れて行かれることを意味するが、他の文脈ではダンは神を「嘆き怒るもの」としてその理性に理解しやすくすることをことごとく糾弾した。そして、ダンは自分の会衆に警告する。聖書は「理性」とか「哲学」とか「道徳」<sup>⑥</sup>と一致するときだけ信じるなら、あなたがたの理解力を越えてしまう。

救済と劫罰の問題に取り組む時、ダンが自分自身と激論するのは、さらに熱を帯びもつと混乱する。なぜなら、それは人間に一番近くで影響を与える神に理性があるかないかの実例だったからである。ダンが大方の英国人のように信じていたのは、この世界やそこにつき込むどんな魂をもお造りになる前にある者には救済を、そして他の者には永遠の滅びをお選びになつていた、ということである。「神は私を実際にお造りになる前に私をお選びになつていたので」とダンは説明している。これは「あらゆる時代以前の最初の審判」の時であった。その時、神は「ご自身に属する者、劫罰にある者と救済にある者」<sup>⑦</sup>を選別する。人間の理性に対してこれは不公平なように思われる。何故神はこの世に存在する以前でさえ、地獄に落とすほどに悪意に満ちてご自身の被造物のある者たちを憎むのか。ダンの時代の宗教的穏健派たちが一般的に言うその答えは、神が個々人を憎むからではなくその罪を憎むからそうなるのである、というものだった。全知全能であられるのだから、人々が犯す罪をもご存知なのである。この答えにカルヴァンは軽蔑を込めて激怒した。なぜなら、そんなものは正に説得力を欠く折衷案であると見なしていたからである。その答えによると神の意志は、人間の未来の行動を当てにしていた。そしてどんな場合でも不正の罪から神を救い出すのに成功しなかった。なぜなら、人間が知ったかぶりをして不完全な被造物を造り、不完全故に罰を与える者の地位に就いたからである。人間どもが地獄に落ちなければならぬと予見しているなら、いったいなぜ神は罪人を創造したのか。この欠点の数々にも関わらず、ダンが穏健な見解に執着した。なぜなら、その見解が提案する神が、少なくとも合理性の基礎のいくつかを保持しているからである。カルヴァンの描く神は保持していなかったのに。ダンが断言するように「神が予知していた人間の罪の故に」<sup>⑧</sup> 神は憎悪から創造される以前に地獄への劫罰に人間を運命づけてい

た。しかしながら、この点で、他のと同じようにダンには明らかに二律背反を感じていた。と言うのも、後の説教集の一つで予定説が人間の業についての神の予知にあると考えるのは誤りであるとわざわざ述べている。そしてこのことは多分、全体として気紛れな神についてのカルヴァン主義者の二者択一が、ダンにはもつとそれらしく見えることを意味しているであろう。<sup>②</sup>

最後に神の不正について昔からの難問へのダンの唯一の答えというのは、そんな質問はすべきでない、というものである。「しかし私は何者なのか、敢えてあなたと論争しようとするのは」<sup>③</sup>と『ホーリー・ソネツ』の中でその時、地獄の不公平について神に問いかけている。もし私たちが選ばれているなら単純に極上の感謝をすべきである。そして、その位にして置くのがよい。ダンがこの慎重な道を押し進める際に用いる例の数々は、神の選びの過程を全く無計画でわがままなものとして描き出す。たとえ十人の内の一人の男が見せしめとして殺されることになっていゝ軍隊にいても、十番目の男の一人でないことで不平は言わないであろう。たとえ王子のお気に入り「毎日敬意と幸運」を携えて現れるとしても、誰か他の者を気に入って自分を選ばないことで王子を咎めたりはしないであろう。もし死刑執行に引っぱり出されていて王様の恩赦が到着したなら、なんでそんなものが来たのかなどと訊ねはしない。<sup>④</sup>全ての例は人間の理性に対して神の審判は単なる鞭に他ならないことを認めている。私たちは理解できないし、議論は無駄である。もつと悪いことに、極端に無謀である。ダンがルターを引用しつつ警告しているが「どのようなにか何故」は、「危険で伝染しやすい」<sup>⑤</sup>単音節語である。その問い自体が「地獄に堕ちるほど忌まわしい」<sup>⑥</sup>ものである。もし地獄に行くことを論じるなら、そこに行くかもしれない。地獄に堕ちる予想数に関して、ダンには他の人より穏やかな見解を取

っていて、神の特別の温情があるなら、今まで生きてきた全てのキリスト教徒の三分の一だけは地獄で焼かれるようにと願う根拠があると宣言した。<sup>⑦</sup>

議論に代わるものは信仰である。信仰とは空に住んでいる怪物が不可知であることを受け入れることを意味したが、善良で愛すべき怪物であることを確かであった。ダンには詩集や説教集の中で信仰は理性とは違って神聖な事柄の中で用いる適切な機能であるという確信を持ち続けた。それは「人間の理性を尋問する神の判決を提示するための憶測の事柄、神に対する侮辱」である、とダンには注意を促す。実際に、神の刑罰はそれらを誘発する違反と比較するとき残酷で相応しくないように思われるが、私たちの刑罰の理由を議論することではない。<sup>⑧</sup>神の正義についてのあらゆる議論は、シャボン玉の価値と同じである。

#### シャボン玉の

玩具、遊び好きの少年たちが管を使って吹くから素晴らしく薄くしてしまう。

議論するのは、子供の遊びである。さらに悪いことに、ダンにはぼんやりと暗示するが、議論は火を弄ぶ「異教徒の遊び」である。<sup>⑨</sup>この断定は一六〇一年『魂の遍歴』の中に出てきて、ダンが理性を抑えたり長く信仰に執着したりするのに苦しみ、ついに英国国教会の聖職者に就く決心が付いたことを私たちに示している。聖職に就く準備のために書かれた『神学論集』には、理性によつて神を求め人々は「コンパスの発明以前に航海した船乗りのようである」と述べられている。彼らは決して陸地を遠く離れることはない。理性は「外見の衣服や小物」のような感覚の印象に頼り、このように明らかに「多種多様で混乱して」いるが、

信仰は「信頼できる」<sup>(8)</sup>のである。結果として、全ての神についての議論などは余分なのである。この反合理的な特徴がダンの説教集の中に漲っている。「私たちは質問することを慎まなくてはならない」とダンには教える。キリスト教の秘跡は「理性によって噛み砕かれるのではなく信仰によって飲み込まれるのである。」<sup>(9)</sup>

だが、ダンにはキリスト教の秘跡を飲み込むときは必ず自分の理性を働かせたがっていた。そしてこの欲求の執拗さで、理性が糾弾する激しさを説明することになる。ダンには熱心で飽くことなく考える動物であったし、「馬鹿で怠ける無分別」<sup>(10)</sup>を軽蔑した。無条件の信仰へと論じていこうとしている時でさえ、ダンには『神学論集』の中で認めている。自分の中でこの論争に気づいて、ダンには『連祷』の中で祈る。

さらなる光に私の心が盲目にならないように、  
つけたしの理性に信仰が視力を失わないように。<sup>(11)</sup>

重大なことに、ダンには肝心なところでいつもの優柔不断の見方が出て、その祈りは曖昧である。なぜなら、ダンには自分の信仰を完全に理性に汚されないうままであつて欲しいと願っていることを意味するかもしれないからである。そしてこのことは至るところで口にする「理性の共通の光」は信仰の光を消し去るかもしれないというダンの恐怖と一致することになる。<sup>(12)</sup>あるいは、ダンが「つけたしの」理性を望んでいることを意味するかもしれない。ただ、ダンの信仰をはっきりと見える状態にしておく程度においてだけではある。この後者の折衷案は、信仰に忠誠を告白させるが、理性の支えとなる役割を許可することで、しきりに理性を称えるダンが自然に引き寄せられたものである。「理性は私たちの魂の左手、信仰はその右手です」<sup>(13)</sup>とダンにはベッドフォード伯爵夫人

に語った。両方とも用いられなければならない。そして、『ヘンリー皇子のエレジー』の中で神の本質と摂理や死後の魂の運命のような事柄は、理性ではなく信仰の領域であると告白した後で、ダンには理性を主張し、十分に準備されるとき信仰が持つほとんど同じ力のあるこれらの秘跡と対抗できるのであると力説する。

理性を十分に延長していけば、  
ほとんど信仰に到達する。<sup>(14)</sup>

もしもそうなら、その時の議論は結局「異教徒の遊び」である必要はなく、礼拝するときにも脳を俗世間に残して置く必要もない。

全ての問題の核心のところで、ダンにはキリスト教の主張が乱暴にもありそうもないと非常に生き生きと気づかせたのである。ダンには独特の機知と辛辣さを用いて会衆にこのことを分かりやすくしている。

一人の異教徒、単なる自然人でもあるキリスト、彼はキリスト教の基本にある教理問答を受けず、指導も受けず、準備などせずこの宿命と共に先ず自らを示すこととなっているのです。あなたは永久に火と硫黄の中で燃やされることになるのです。もしも三位一体の唯一なる神を信じないならば、もしも三位一体の第二の神の御子の受肉を信じないならば、処女マリアが子供を身ごもり、神のその同じ息子であり、その神の子が人になって、永遠なる神であるのに、死んでしまったことを信じないならば、彼はこの貧しい魂に何の霊的な配慮もせず自らを信仰させるよりキリスト教の秘跡を嘲らせるようになるのです。<sup>(15)</sup>

キリスト教の冷笑的な茶化し方はヴォルテールに匹敵する。しかし、ダンと言うまでもなく不遜にもそうしたのではなかった。また、この文章が採られた説教の中で言及された事柄が理性ではなく信仰によって受け入れられなければならないと進んで承認もしなかった。反対に、ダンが主張するのは、もしも人が正しい方法で推測に基づく信じがたい問題に取り組み、先ずこの世は創造者がいたにちがいないと認めるようになり、そこから聖書の中の神の示した世界の必然的な真実までを通して働いているだけなら、人は理性的に確信を持った回心で終わることになるだろう、というものである。伝道する地域への想像上の旅として見ると、これは私たちにはあまりに樂觀的であると映るかもしれない。しかし、信仰が意味する不合理な考えをはっきりと認めるだけでなく信仰は理性的であるとダンがどうしても信じたいという緊急性が表れている。「どうして」と「なぜ」を忌まわしく憎むべき問いであると言ったダン本人がその問いを發せざるを得ず、そうしている自分を知つてもいて、断続的にも関わらずそれらの問いを正当化しようと葛藤していた。

だから、ダンの信仰的な事柄の中で理性の評価は激しい葛藤に終わる。自然界の知識に関連づけるとき、いかにダンが理性を見ていたのか問いつづける。人が思うかもしれないことは、神の道を様々に推し量るのが難しいと仮定すると、ダンが理性が成功を成し遂げる望みのあるこの世界に一番好く合っていると心に決めていたのであるう、ということである。ベーコンも彼の同時代も友人もこのことを理解していた。実際にはすでにオツカムが二世紀前から理解していたことではあった。ベーコンの『学問の進歩』は、神学者たちが時代遅れであると気づいていて、代わりに人間の脳の力を人間の利益になる自然の秘密を開発することに向けているという理由で画期的な作品である。その本は神が啓示する言葉の真理と「私たちの理性では気が進まないのは分かっているが」そ

れを信じる私たちの義務についてのお決まりの譲歩をしている。しかし、正にその応諾をすることで信仰が利益をもたらす議論ができたことの領域から閉め出されてしまい、このように実質的にヨーロッパの教育体系を作り替えてしまった。ほどなく、近代教育学者の中でも最も偉大でベーコンの熱烈な弟子であるジョン・エイモス・コムニウスはヒューマニズムが無視してきたような科学的で実用的な科目に適切に集中することで、創り出された全世界が人間の理解の範囲内で捉えられる<sup>(註)</sup>という自分の信仰を支持するために神の姿に造られた人間についてのお決まりの議論を用いていた。汎知主義の誕生である。ダンがベーコン主義者であったなら、私たちはダンの詩や説教集を見たくはない。ダンは並外れて議論好きだったから、代わりの出口、おそらくたくさんの人間の見方から科学の中のもっと価値のある出口を見いだしていたであろう。

しかし、実際のところダンの科学についての見方は現在ではつむじ曲がりの曖昧主義者のように見える。これは幾分かはダンの良心の痛みを感じる懷疑主義のせいであり、幾分かはダンのカトリック教の生い立ちの保守的な好みのせいにされることになる。ダンが進歩の存在を否定したということではない。私たちが注目してきたように、ダンが船で使用する羅針盤を現代世界と古代世界を区分する発見と見なしていた。(大多数の同時代の注解者たちのように)ダンは火薬と印刷術を同じく重要な前進として引き合いに出している。しかし、進歩などダンにしてみればもうすでに起こってしまったものとしたか映らなかつたようである。進歩は歴史みたいなものというところだった。進歩は続いていくであろうし、ダンが知っている世界を強力な質的転換へと従属させるであろうことなど、ダンを突き動かしたようにには思われなし、むしろダンはそのようなことを思いつく気遣いもなかつた。ベーコンが自分の心を何世

紀にもわたり前へと漂流させながら、『ニュー・アトランティス』のような作品の中で徐々に達成される科学の勝利がどうなるのかを想像するのを好むのに対して、ダンの自我の力とねばり強さは全く役割のない未来を知るのを避けていた。ダンが容赦なく無関心を示す話題である。むしろ、私たちが見てきたように、ダンは自分の死と共に世界は終わるといふ信仰を心に抱いている。ダンが理解していたように、知的な疑問は全体に過去で占められていた。『神学論集』の中で「偉大な賢者たち」が関わる研究プロジェクトについて書くとき、全て懐古的であり、古い大理石彫刻像や聖牌を解説したり、古代の予言を説明したりしている。<sup>⑤</sup>このような害のない修繕の仕事の中で、ダンは理性が何かを達成するかもしれないと信じる覚悟はあった。しかし、理性が徹底して現在とか未来を変えるとは思いつかなかったのである。

事実、ダンには生物学、医学、天文学、その他の科学について新旧とりまどめて数多くの著作を読んだ。ダンには疑問のあるあらゆる分野で考えられていたことを熱心に探し出した。しかし、ダンの情熱は本質的には収集家の域を出ていなかった。ダンは自分の読書中に見つける互いに異なる意見を確かなものへゆっくりと進歩する役割であると見なしていなかった。むしろ、理論が魅力的に混乱することで、ダンには人類はいつも暗闇に包み込まれるものであり、宗教の中と同じように科学の中でも議論は究極的に要領を得ないという証拠のように思えた。物事がどのようなに存在するかは、神のみぞ知るである。そして科学者たちは自分たちの結論が単に外見から導き出されたものだから、全てをぼんやりと見ているのである。だから、最も基本的な話題についてさえ科学的な考案にひどい格差がある。ダンが嘲るように「一匹の蟻に関する人間の著書の中に百もの異なった意見が記されている」<sup>⑥</sup>この例えが好きだった。それはまた『第二周年詩』に出てくる。

一匹の蟻について百もの論争があり、学者でも融通がきかず自説を取り消せない者もいる。<sup>⑦</sup>

ダンの推論は、現代人が推論するかもしれないように、人間の注意が蟻に集中するから蟻が理解される機会が多くなるというのではない。むしろ、ダンが現在の結論に達しない状態を知識というものがいつも結論に達しない証拠と受け取っている。同じ目的に向けて『第二周年詩』は誇らしげに誰も明るみに出すことができなかった数多くの初歩の医学的、生物学的主題を取り上げている。例えば、胆石、粘液、葉緑素、心臓中の血球と血液の動き。

知っているのか、結石が皮膚も破らずに  
どうやって膀胱の空洞に入るのかを。さらに  
どうやって心臓に向かって流れ込む血液が  
一つの心室からもう一つの心室に移るのか。  
またお前が吐き出す腐敗した物質のために  
どうやって肺はそれを貯えるのか、知っているのか。、、、  
なぜ草が緑色なのか、なぜ血が赤いのか、  
こんなこともまだ誰も解けない謎なのだ。<sup>⑧</sup>

ここでの最後の行は懷疑主義者ローリーに何か影響を受けているかもしれない。ローリー卿は自著『世界の歴史』で、「最も小さいもの」の中でさえ無視されながら「人間は足下の草になぜ赤色ではなく緑色なのかの本当の理由を告げること」<sup>⑨</sup>ができなことを観察している。あるいは、おそらくローリー卿がダンを読んでいたのであろう。ともか

く、ベーコン主義者のダンの読書リストには、未来の研究のためのプログラムが組み込まれるであろう。続く世代は正にこれらの疑問に答えことに心を傾けることになった。四年以内にはウィリアム・ハーヴェーが血液循環に関する自分の理論を医科大学に向けて明解に説明していたし、このように心臓の心室の間の関係の問題に決着をつけた。ここに至る道の重要な一步は、すでにジェラルド・コランバが十六世紀の初めに踏み出していた。彼は肺の循環を発見していた。<sup>②</sup> ダンがコランバに触れなかったのは、知らなかったのかもしれないが、とにかくダンの読書リストは思想を刺激するつもりではなく、それを疑うことにあった。科学なんかくだらないということをダンには自分の読者に確信させたかったのである。死んで天国に行ったとき、知る価値のある全てについて直ちに知識を持つことになる。なぜ今思い悩むのか。だからダンは理由付けをするのである。

何時、この学者振りを捨て去り、感覚や

空想に学ぶことを止めるというのか。

お前は遠眼鏡を通して見ている。小さなものも

大きく見える、地上では。でも、もの見の塔に上って

あらゆるものを錯覚なしで見てください、

天国では天国に関するものは何でも直ちに知り、

天国に関係ないものは直ちに忘れるであろう。<sup>③</sup>

私たちが粘液や胆石や血液の循環の構成について天国で明確な見解を持つかどうかとダンが言っているのではない。しかし、もしもこのような事柄が問題となるなら、ダンが言っていることは確かであると私たちは言えるであろう。

だから、これは科学についての信仰の意見である。そのことについて時間を無駄にするな、死ねば答えは分かる。ダンが無知を擁護するのは単純ではなかった。神学的な思索のように要領を得ないと同時に人を動かさずにはおかない科学的な思索を見いだした。議論は「異端のお遊び」であると「魂の遍歴」の中のダンが表明するのは、正に同じ詩の樂園追放の物語の中で例証される時の神の正義についての奇異な考え方の洞察力に富む告発によって先立たれているように、ダンはどのように魚が息をするのかについて相反する理論を魅力的に概説するが、ただし自分で問題はないと宣言することで急に終わりとする。

そして魚は時々空中で息継ぎをするために、

飛び跳ねるのか、あるいは水面下で空気を吸うのか

粉砕器か蒸留器のように作動する器官が水を薄くしたり

空気のようにしたりしなければならぬのかどうか、

信仰には関わりのないこと。<sup>④</sup>

信仰は違うかもしれないが、人間は自然に関わりを持った。魚の呼吸器官を詳細に調べた最初の科学者デウヴァニーは、ダンが死んでから二十年たつて生まれた。二人の英国人レイとウィラビは構造に従い魚を分類することで魚類学の現代の科学的足掛かりを作り、一六八六年にオックスフォードで出版した。単純に、ダンの態度が優勢であったなら、このような計画は決して実現しなかったであろう。この点でダンには滅び行く伝統に属しているのであり、素晴らしい新ベーコン主義の世界に属してはいない。中世の人間が努力することの空しさの感覚がいつも身近にあったし、ダンのよそよそしく懐疑的な気質に合っていた。ダンはいかに科学的な疑問を夢中にさせる気晴らしぐらいいにしていた。決して何事

も解決しないし変化もさせない。

天文学においても、ダンは懐疑的な保守主義者のままだった。かなりの量の新刊書を読んではいたが、地球が自転するとか、太陽は動かないことを信じることは決してできなかった。明らかに大多数のダンの同時代人たちも信じることはできなかった。コペルニクスの『回転』は地球が自転していて惑星と一緒に太陽の回りを廻っているという仮説を提案して一五四三年に出版した。十六世紀が終わる前に英国人の天文学者トマス・ディジズは一つの方法を思いつく。(天体視差を観察すること)その方法を使えばその理論の真理は示されるかもしれないからである。しかし、必要な解釈をするのに十分に優れた道具が無かったし、人々の多くは太陽が一年のどの日でも地球の回りを廻っているのを見ることのできるから、コペルニクスの言っていることは馬鹿げていると感じていた。ルターはコペルニクスのことを馬鹿者と呼んだし、教育者たちは子供たちに二世紀のアレキサンドリアでエジプト人の天文学者プトレマイオスが完成した十分試験に耐えた天動説を教え続けていた。その上、数学的に高く精巧になってはいたが、この学説は天罰が下る占星術の基礎であった。それは人間の生活について惑星運動の影響を組み入れた学問の一分野である。天文学とはちがって、それに対して誰もまだ使い方を見つけていなかった。占星術は明らかに実際的で重要であった。人々はそれを覆すかもしれないどんな考えも進んで奨励しようとはしなかった。従って、マニリウスの『天文学』(キリストの誕生のすぐ後に完成した)は地球中心とした占星術的であったが、十七世紀の間英国の学校で標準的な教科書のままであった。コメニウスのように上級の術学者でさえ、コペルニクスの考えに対しては時間がなかった。<sup>⑧</sup>新科学の普通の評価はフランスのプロテスタントのギョーム・デュ・バル

タスにより創造についての人気のある叙事詩の扱い方から正確に測ることができる。その創造はミルトンの好きな本の一つであった。デュ・バルタスは揶揄する。

聖職者たちは(いかに冗談が馬鹿げているかを考えているが)天も星も決して廻ることはなく、この偉大な丸い地球の回りを踊ることもないと考えている。

しかし地球自体、我々のこの重く巨大な球体は二十四時間毎に一度自転するのである。<sup>⑨</sup>

もしも地球が本当に東から西にその主軸で回転するなら、デュ・バルタスは東に向かって発射した弾丸は決して銃身を離れないだろうし、空中に真っ直ぐに放たれた矢は射手の西方に落ちるだろうと説明する。

これらの理屈に武装されているので、コペルニクスの理論づけを攻撃するのは不必要であったのだ。

ダンにはコペルニクスの天文学を単なる馬鹿げたことであると見ている。それは私たちの一般的な人間の墮落の憂鬱な例証である。ダンにはベッドフォード伯爵夫人への書簡詩の中で私たちが自分たちの精神を反応の鈍いものとしたり自分たちの肉体を満足させる方法を使って不機嫌にそれを関係づける。

新しい科学が太陽を停止させて、

受け身の地球にその回りを廻れと命ずる、

だから我々も精神の活動を鈍くして目的の無いものにした。

肉体だけが忙しく偉そうにしている。<sup>⑤</sup>

ここでその年の主要な知的大躍進はむしろ驚くべきことに精神的な無気力で首尾一貫している。

しかし、私たちはこれがダンの首尾一貫した態度を代表しているとか、あるいは、ダンが昔からそうだったと想像すべきではない。事実は、その理論がダンの思索に対して材料を提供してくれさえすれば、ダンは新しい理論が本当か嘘なのかなど気にしていなかったのである。ダンは気楽にそれらの理論を楽しんだり、避けたり、醸し出される雰囲気や時を得た思想の現行の様式に対してそれらの理論に恥を掻かせたりしたいと思っていた。新しい理論はダンがイメージのために拒否するのか、引き寄せるかどうかダンの製粉所にとっての穀物であった。地球である人間が、いかに神に向かって動くべきかについて一六〇九年にグッドイヤー宛に手紙を書いたとき、ダンは新しい天文学が「このように十分適用できる」<sup>⑥</sup> ことをつけ加え、その新しい天文学が考えるためにつけ加えられた道具であるという適切な実例をあげている。『イグナティウスの秘密会議』の中でダンの描くイグナティウスはコペルニクスに述べるとき、あなたの理論がおそらく正しいでしょう（「あなたの一連の意見は十分に真実であるかもしれない」と容認している。そして、その理論は地動説の宇宙観が数人の古代の天文学者たちによって押し進められてきた（事実そうだったように）のだからとにかく独創的ではない、とつけ加えるのである。さらに、イグナティウスはコペルニクスの発見したものが大して問題にはならないと続ける。なぜなら、人間に意義ある効果を全くもたらさないからである。イグナティウスの主人である悪魔は、それらの理論から得るものは何もない。

彼は何を気にする？地球が移動するのか、じっとしているのか、とお前が地球を天にまで持ち上げてしまったことで、人間たちが新しいバベルの塔を建てたり、また神を脅かしたりするあの確信に至ったのか。あるいは、地獄はないとか、罪に対する罰を否定するとか、この地球が自転することから結論づけるのか。人間は信じないのか。以前生活していたように生きないのか。<sup>⑦</sup>

コペルニクスの理論のこの無頓着な受け取り方は、ダンが宇宙の混沌と腐敗を描いた『第一周年詩』の陰鬱な記述と比べてみると驚くほどに好対照となる。二つの文章はお互いに数カ月以内に書かれたのであるが、その受け取り方は（「新しい科学は全てを疑う」）宇宙の混沌と腐敗に貢献してきた。私たちはどちらもダンの「本当の」反応として選ぶことは出来ない。ダンにとっての思想は作りものじみていたし、結局のところ全てが同じように疑わしかった。自分の気分にあうように思想を使っていたのである。自分が懐疑的になることによって、ダンは精神を作り上げている狭い営みから解放されたのである。人類の不完全な能力を与えられることで、全ての科学は、ダンの考えによると、とにかくサイエンス・フィクションであったし、取り引きの基盤として使い、完全な自由と不一致を用いてその主題の間で自由に選んでいた。このように地球が動くという理論はグッドイヤー宛の手紙の中で魅力的に「適用できる」と証明されてしまっているが、地球が動くことに反対する議論はサマセット伯爵の婚礼歌の中でさらに訴えるようになった。その時、ダンは結婚でのお祭り騒ぎを描写していた。

地球が動くという理論が新しいなら、

今日その説が真実だということになろう。

なぜなら、全ての者が踊り狂っているからだ。

彼らは空中を歩み、飛び上がったところに落ちてこない。<sup>⑤</sup>

ここで、もしも地球が自転するならば何が起るのか、すなわち人々が飛び上がると地上から離れたところの西へ転がったり着地したりするという人気を博したデユ・バルタス風の図式が、幸運にも目に浮かぶようにダンによって活写されている。ダンが真面目にこの反コペルニクスの反論に共感していたのかどうか分らないし、そんなことを問題にする方が間違っている。他の科学的な思想の場合のように、ダンは想像力が自分を捉えるときその思想を取り入れたり取り入れなかつたりすることができた。

ダンの科学的な思考の「発展」を示そうとするとどれもこれも、結果として失敗に終わる。古代の天文学やプロトレマイオスの天文学を組み込む詩がもつと近代的な見方を採用している詩よりも早く書かれていたにちがいないという仮説は、安全ではない。私たちはダンの新しい星の扱い方からこれを推し量ることが出来る。一五七二年デンマーク人の天文学者チーコ・ブラーエはカシオペアの星座の中に新しい星を観察した。彼は若い頃、決闘で鼻を失っていて、銅細工で作った人工の鼻をつけていたので一般の人々の心にずっと残っていた。その星は徐々にぼんやりとしてきて、一五七四年春には消えてしまい、チーコ自身を含め多くの人々によって奇跡だと見られた。しかしながら、チーコの弟子ケプラーが他の二つの星を確認した。一つは一六〇〇年の白鳥座の中で、もう一つは一六〇四年の蛇座の中であった。ケプラーは一六〇六年に『新しい星について』の中で自分が観察したことを本にして出版した。それから望遠鏡を使ったガリレオが出てきて、天体の地図を改良した。一六一〇年のガリレオの『星の情報』の中で次のように宣言した。わたしは以前

には決して推測しなかった星を数えきれないほど大量に発見しましたし、土星の四つの惑星も見つけたのです。知的な同時代人に関してガリレオが発見した星々の衝撃はダンの友人ヘンリー・ウオットン卿が一六〇一年三月一三日付けでヴェニスからソールズベリー伯爵宛に書いた手紙から判断できる。『星の情報』の一冊が同封されていた。

さて、現在の出来事に触れまして、私はこの手紙に添えて陛下に(正にそう呼ぶことができる)一番不思議なお知らせを一つお送りいたします。世界中のどこからも未だ受け取っていないものです。それが同封いたしました(今日海外から届いたばかりの)パデュアの数学教授の一冊の本です。彼は光学機器の助けを借りて(それは対象物を大きくしたり、近づけたりします)フランダーズで最初に発明し、自分で改良を加えたのですが、土星の軌道の回りを廻っている四つの新しい惑星を発見したのです。その上、たくさんの他の知られていなくて最新のもの、すなわち、月は球形ではなく、たくさんの突起を帯びていて、全ての中で最も不思議なのが、地球の本体からの反射による太陽光で輝いている、と彼はそう言っているらしいのです。もし全体の主題について彼が最初に以前の全ての天文学を、そして続く全ての占星術をもひっくり返してしまつたならば、、、というのも我々は体面を繕うために新しい天体を持たなければならぬから。これらの新しい惑星の長所のために、不足分は天罰を受ける部分を変更しなければならぬし、なぜまださらなる惑星は無いのでしょうか。<sup>⑥</sup>

ウオットンが疑問をいくつか持っていること(「著者は極端に有名になるか、極端に馬鹿になるかのどちらかの運命を担う」と彼は言う)を

け加えるのは公平であり、これはごく自然である。なぜなら、ガリレオの観察はウオットンが称賛するように、その時代の一番基盤となる信仰のいくつかを混乱させたからである。その信仰があまりに習慣化していたので宗教的な真理と共に消滅してしまった。動く天体と球体の完全な地理上の丸さについてのアリストテレスの概念は、何世紀にもわたって天の領域という形而上学的な完全の中でキリスト教信仰の一部となっていた。月は瘤だらけだとガリレオが発見したことで（惑星が円形ではなく楕円形で太陽の回りを廻ると一六〇九年に出版された『火星の回転』の中でケプラーが展開した事と共に）この聖なるイメージを完膚無きまでに壊してしまった。なおその上に、新しい星が現れたり消えたりすることで、天体の超自然は変わることがないと半ば神秘的に信じていたことに激震が走った。

この全てに対するダンの反応は典型的に気紛れで一定していない。『自殺論』の中でダンはアリストテレスの信奉者たちを批評している。なぜなら、彼らは新しい星が次々に発見されているにも関わらず、不変である天体を考えるべきだと主張していて、ダンが言うには、新しい星々はアリストテレスを「全く負かして」いるからである。ダンはたった二年前に出版されたケプラーの『新しい星』に少しばかり言及していて、いかに自分が最新であるかを示そうとしている。このことで確かにダンが確信を持った新しい思想家のように見えるし、それでダンの天文学的興味についての一番学識のある注解者である C・M・コフィンがそれを理由に『熱病』<sup>⑧</sup>という詩は「変化できない」<sup>⑨</sup>ような天空に言及しているから比較的初期の頃であったにちがいないと納得してしまったのである。しかし、実際のところダンが『自殺論』<sup>⑩</sup>の三年ぐらい後で書いた書簡詩の中で天空の変化できない性質についてほめかしているのを見つけることができる。十年後の説教の中でダンは一

び猛烈な勢いで伝統主義者たちと自分を一緒に比べている。

もし別の人が見たり考えたりするなら、私以上のものを見る。すなわち、もし望遠鏡の助けを借りたり、おそらく想像だけで私が見るよりどんな星座にも一つや二つ以上の星を見るならばの話である。しかし、その星はどんな星座にもならなくて、以前完全であった星座に何も付け加えないのである。<sup>⑪</sup>

この無愛想な反啓蒙主義は、正にダンが『自殺論』の中でアリストテレスの信奉者たちを責めたたえたものである。しかし、天文学的な基盤で『熱病』に初期の日付を付けることは、ダンが説教をするときまでにさらに二重に保守的になってしまったと結論づけることと同じくらい危険であるだろう。ダンの懐疑主義によって自分が好きなようにまた好きなときに正反対の見解の間を行きつ戻りつしたのははつきりしている。

だから、また新しい科学的思想を持っている他の敵対者とも同席できるのである。中世社会の構造的な原理の一つは、宇宙空間に四元素が整頓されていて、その結果、月と同じくらいの高さで地球を取り囲んでいる最高の元素、火の領域があると信じていた。イタリアの科学者ジェローム・カルダンは、他の事柄に混ぜて進化論、自然淘汰、種の起源の理論の概略を述べたりしたが、一五五一年の『繊細な事物』の中で火の元素の領域があることを否定してしまっていた。ダンはその本をすでに読んでいる。ケプラーもまた否定していて、もし我々が本当に障害物になつて火を通して星を見ているなら、星の光はぼんやりと現れるであろうが、実際はそうではない、と論じている。ダンは「火の元素はすっかり消えてしまった」と述べるとき、『第一周年詩』の中でこの当時の新しい意見を受け入れているし、エヴリン・シムプソンはダンの科学

的思想が徐々に進歩している例としてこの記述を提供している。女史が述べるように初期の詩の中で、ダンは火の元素があると推測しているが、ケプラーを読んだからは心を変えてしまった。<sup>⑧</sup>しかし、これはダンの思想をあまりにも体系的にしてしまうことになる。事実として私たちは『第一周年詩』の数年後のダンを見る事ができるし、全く当然のこととして火の元素があること、空気の元素を越えた空間に位置していることを主張している。同じく私たちはほぼ同じ日付で全体の事柄は「疑わしい」とか「議論の余地がある」<sup>⑨</sup>と主張するダンを発見することができる。各々の場合でダンが取る見解は、とつさの雰囲気と想像力に富む威力を用いてたまたま組み込んだものである。天文学者たちが星の領域の「丸い姿」を破壊してしまったと『第一周年詩』の中で嘆げくのに対して私たちは一六二七年の説教から挑発的に非科学的な断言をするかもしれない。地球の「丸い表面」から天の「丸い凸面体」まで大きな円形の中に「神は全てのものをお造りになった。」<sup>⑩</sup>

その当時、ルネサンス懐疑主義はダンにとって詩的な好条件であった。なぜなら、それで全ての真実は無限に融通がきき、想像力が解放されたからである。またダンは新しい種類の詩を創作することができたのである。なぜなら、理性が誤りに陥りやすく、神を知ろうとする方法としては時代遅れであるという感情は、理性的な人間が懐疑主義に取って代わる使い方とかその誤りに陥りやすいことを考慮に入れるものを見つけなければならぬことになっていたのである。ベーコン流の答えは、実験科学であった。それは超越的な真実だと主張するのではなく、理性の認める限度内で実際の目的に向かって作用するのである。ダンはこの未来を信ずる人のプログラムには関心を示さず代わりに理性によって詩を大仕掛けに乗っ取る計画を立てた。しかし、常に理性の効率の無

さ、気紛れ、無常を晒け出す様々の仕方では計画を履行したのである。私たちは見てきたが『幽霊』や『日の出』や『一周年記念』のような詩は、その詩の道理に基づいた外面を通したり手段にしたりして理性が支配できない内面の葛藤を示している。

しかし、理性の危機はダンの宗教的な自己と俗的な自己に違った仕方で影響したことを述べずに終わってしまったら間違ってしまふであろう。愛について書くとき、ダンの懐疑主義は自由に深める効果をもたらす。懐疑主義のお陰で、ダンは豊富な見解を経験できるようになったし、人間の心の合理的な価値判断から解放されていた。しかし、ダンが神について考えたり、考えようとするとき、理性の切迫した崩壊がダンを苛立たせ目覚めさせたのである。『ホーリー・ソネット』は、私たちが一度ならず述べてきたように、多くの躍動感を命がけの知的な難局に負っている。その詩は聖なる者に近づこうと葛藤しながらその難局に向かって縮小されている。その詩の血迷った破格の言い回しや荒削りの耳障りな音は、その詩が成功する理由となった。ダンが思想の真理より思想それ自体に興味があったという T・S・エリオットの論点は<sup>⑪</sup>、ダンが神について考えることに応用する限りでは、全く誤った方向に導いてしまふ。神について真実な考えを持つのは、正確には不可能だった。確かに、そのことがダンを宗教的な著作の中で激しく揺り動かした事実はある。結局、このことこそが、私たちが偉大な恋愛詩と説教集を比較するとき、に説教集の中の緊張や困惑の感覚を説明しているのである。

もしも（それが遠く距たった比較であることは認めるが、その適切さを示したいと望んでいる）説教の中の無神論に反対する合理的な議論と『禁止』という詩の合理的な構造とを比較するならば、私たちはダンの作品の二つの領域に関してこの理性の崩壊の異なった効果を図解できるかもしれない。無神論は、説教するときにはダンがしばしば戻ってくる主

題である。ダンの時代に無神論が本当にいかに日常茶飯事であったのかを言うのは難しい。なぜなら、同時代の人々は、共産主義から魂の不滅についての疑念に至る大多数の政治的・宗教的な考えを無神論と決めつける傾向があった。<sup>⑧</sup>ダンの義理の弟ウィリアム・リリーは「機知に富んだ大胆な無神論者」<sup>⑨</sup>として知られていたが、本人が実際に神の存在を否定していたという確証はない。他方、カルヴァンは『キリスト教綱要』の中で「かなりの数の」神を信じていない人たちがいると主張している。ダンの時代の英国で自分が無神論者であるという自己告白した人物は、ロバート・グリーンであり、彼の『僅かばかりの機知』は青年時代の無神論的な腐敗ぶりを彷彿とさせ、また無神論と言えればグリーンの友人マローウだ、としている。しかし、おそらくそうだと思えるのだが、ダンが惹きつけられていた主題というのは、自分の仲間の中に無神論者がいるのかと疑っていたからではなくて、神の存在が合理的に証明され得るかどうかという問題が、理性の働くどんな価値判断の中でも重大であるとダン自身が認識していたからである。理性を信仰と和解させようとするとき、ダンには継続的に信仰の基本的な教義から逸脱してしまうことに直面し、継続的ではあるがそれは少しも逸脱することではないと言いつ張るのである。

神の存在を証明できるかという問題に関して、アキナスとスコトゥスの両学派は、ダンが述べるように、多くではないが意見が一致してこなかった。トマス学派の人たちは、神が存在するかどうかは神ご自身が証明する、という。スコトゥス学派は、否定する人たちは理性を使わなかったけれど神の存在を否定できる、<sup>⑩</sup>とした。ダンには敬意を込めて両方の見解について語っていて、トマス・アキナスの見解に傾いているが、どちらも苦悩するルネサンスの思想家であるダンにとっては本当に多くを利用しなかった。なぜなら、両見解は議論でなく議論の回避だ

からである。もしも敵対者が神を信じないと宣言すれば、そいつは嘘をついているとか、頭を使っていないなどと切り返すのでは論理的な程度から言っても立場を進めることにはならない。しかしながら、ダンは、とても残忍な修辭的な手法で自分の反応の貧しさを偽装してはいるが、繰り返しここに収斂している。もしも神が存在しないなら、存在しないと言うことさえできないのだ、とダンは激しく叫ぶ。無神論者は真面目に神が存在しないと考えることなどできはしない。神を見ることはよって、神の存在を思い起こすことになる。

さあ、全てのドアと窓に鍵をかけて、あなた自身だけを見つめよ。さあ、あなた自身を近くの牢獄に閉じ込めよ。それで、あなた自身を見ることはできない。あなたの脈を感じ取るだけせよ。あなたの脈を結滞させるか、麻痺させよ。それで、あなたは感じなくなる。考えるだけせよ。虫、種、あなた自身、あなたの脈、あなたの考えは全て証拠。それで、全て、この全て、その全ての部分は神に創られた作品、神の作品なのである。

<sup>⑩</sup>

これらの長広舌が議論の中核である限り、創られた世界は創造主を持つていたにちがいないという単純な前提である。「時計か、オルガン」は誰かに作製される、だから宇宙もそうであり、この意味でこそ、無神論者は見るもの全てから、神を思い起こすべきである、とダンは明快に述べる。この馴染み深い「証明」は、言うまでもなく本質的に間違いである。なぜなら、時計とかオルガンと宇宙との間の立証されない類似に頼っており、宇宙がチックタック言うとか、轟く音で動き出すと主張する

ためにまことしやかに用いられかもしれないからである。ダンと会衆はこのうえなく気づいていたので、宇宙の起源の全く他の記述が役に立った。アリストテレスが教えていたのは、宇宙は永遠で、決して創造されたものではなかったというものであった。(その説はキリスト教が教えているように神は永遠で決して創造された存在ではないと信じるのと同様に論理的ではある。)ルクレティウスは宇宙が偶然に原子と一緒になつて作られたと論じた。これらの学説はダンの説と同じように合理的な証明とか反証が可能ではなく、ダンの知的状況の中で一つ一つの現実が必然的に欠点なのである。ダン自身の場合の弱さは、消耗するほどの強調を説明することになる。その強調を用いてダンは提示するからである。神の存在は神ご自身の証明であるという説教の中での入念な展開は、もし本当であれば展開は不必要であろうから正確に怒りになる。

ダンの立場は難しいので、脅すことで自分の議論を補強する傾向があった。暗い中で一人でいると、あなたは神が存在することをあえて否定しない、とダンには会衆に思い起こさせる。教会とか劇場にいるときには何もかも大変上手くいく。あなたは説教者が神の審判を使って脅すのを聞いたり、あるいは役者たちが邪悪な者の失脚を揶揄するのを見たりするからである。次のような場合は簡単に無視される。

人前で出来るだけ自信を持ちなさい。なぜなら、人が無神論者の避難所であるから。わたしがあなたに休息を与えるのはやつと最後の審判の日の時。その時、わたしは平身低頭しているあなたを見るかもしれない。崩れて神の激しい怒りからあなたを庇ってくれるかもしれない丘を願いながら。その時、あなたに訊ねる。今、神は存在するのか。わたしはあなたに休息を与えるのはやつとあなた自身の死ぬ日である。その時、あなたは神

が存在する十分な証拠を手に入れるだろう。たとえ他の証拠が無くとも、悪魔を見つけたら、天国は存在する十分な証拠がある。たとえ他の証拠がなくても、地獄を感じ、その時、あなたは訊ねられるだけ、今神は存在するのか、と。わたしはあなたに休息を与えるのは、数時間だけ、六時間だけ、真夜中までだけ。その時、目覚めよ。それから暗くして、一人になりなさい。その時、神があなたに訊ねるのを聞きなさい、わたしは今あなたに訊ねたことを覚えていなさい。神は存在するのか、と。もし敢えて言うなら、いいえ、と答えなさい。<sup>(13)</sup>

この爆発するような脅迫は、合理的とは言いがたい。山々が自分を襲ってきて神の怒りから庇ってくれるのを懇願するマローウのファウストの適切な劇的回想を伴うといふともである。恐怖、暗闇、孤独にさいなまれる時にこそ、精神はさらに正確な真実を知るといふように組み込まれた仮定であるとも言いがたいのである。神の存在を証明するためのダンの信仰というよりむしろ理性への頼みの綱が、理性が崩壊する中で終わってしまったのである。その文章の敵意ある修辭的な言い回しの背後にあるものは、理性が危険な機能であることを理解したことである。それは雰囲気、状況、一日の何時の時かによって様々に変化するからである。実際に、これらは、理性が『ソングズ・アンド・ソネット』の中で受け入れられるその期間のことなのである。しかし、説教集の中では理性の狡猾さでダンは怒りを爆発させる。ところが、詩集の中では理性が人間の心を十分に理解する役目として受け入れられている。説教集は理性がもつと頼りになれないという事実にひどい苛立ちを記録している。しかし、詩集ではそうではないのである。

このことで私たちは『禁止』という詩に注目することになる。その詩

を比較してみよう。ダンは無神論的に猛攻撃をすることで理性を配置しているのである。

ぼくを愛さないように気をつけてくれ。

せめて、きみに禁じたことを覚えていてくれ。

ぼくの惜しまず浪費した血気盛んな息づかいを

きみが浪費することであの時のきみにきみの

溜息と涙で埋め合わせさせようというのでは

なく、あまりにも嬉しくなつてぼくたちの命が

すぐにすり切れてしまう。だから、ぼくが

死んできみの愛が果てないように、ぼくを

愛しているなら、愛さないように気をつけてくれ。

ぼくを憎まないように気をつけてくれ。

また、勝利に酔いしれないように。

ぼくは自分の執行人になつて憎悪に憎悪

をもつて報復するつもりもなく、

もしきみが勝つてもぼくが憎んで死ねば、

勝利者の名を失うことになる。だから、

ぼくが無になつてきみが小さくならないように、

ぼくを憎んでいるなら、憎まないように

気をつけてくれ。

だけど、ぼくを愛し、憎みたまえ。

そうすれば、愛憎の両極端はその職分を果た

さないだろう。愛してくれ。もつと穏やかに死ねる。憎んでくれ。きみの愛がぼくには大きすぎるから。でなければ、ぼくではなく愛憎それ自体を消し去ってくれ。そうすれば、ぼくはきみの戦利品ではなくて、支えとなる。きみの愛情と憎悪とぼくを失わないように、ぼくを生かしたままで、愛し憎みたまえ。<sup>(4)</sup>

私がこの詩を選んだのは、筋の通らないことを筋の通るようにするダンの終生の気質をかなり明解な方法で描き出しているからである。私たちが初めて読んだときでさえ互いの連から混乱するその詩の二つの構成要素を感じることが出来る。このことから私たちはさらに都合の良いように分離してその構成要素を調べることが出来る。一方で第一連と第二連は出だしから陰鬱な命令調で始まっている。狼狽と脅迫との間でバランスを取りながら、第一連第二連の出だしは詩の残りの部分より深いレベルで作用していて、詩が含んでいる他のもの以上にもつと神秘的に生き生きしているように見える。二つの出だしと比べて、私たちには最初の二つの連の残り第三連全体を作り上げている議論がある。この議論は論理的な拡張の形式を取つて、最初の警告が意味しているものを説明している。その全てに明晰さがあるがゆえに、その議論は出だしの詩行以上に浅薄に見えることもなく、十分に説明しきれていると私たちは満足することができるのである。

この矛盾を追求するとき私たちが気づくのは、その詩が負わせている合理的な構造である。その論理的思考は三つの同じ部分に分かれ、二つの前提と一つの結論、つまりは三段論法の方程式という訳である。合理的な感じを持たせるために、最初の二つの連はそれに相応しい論理的

な様式を取っている。 (“Not that... But... Then...”) さらに、お互いを禁止する二つの矛盾する両極端の枠組みは、第三連に拡張していくとき、その詩に量化《賓辞・語・命題の論理量を定める》の基本を紹介する。それは『ソングズ・アンド・ソネット』のよくある合理化の工夫の一つである。その詩集は、桜草の花びらとか影の発展とか愛の成長を量化することで表現できる範囲内に努力して情緒を持ち込んでいる一つ一つの詩である。

しかし、私たちは詩の合理的な枠組みが実際に作られる様々な感情を考えると、理性の外側は溶解する。ダンの中ではお馴染みの無になる恐怖（「ぼくが無になつて」）は、強烈に出てくる。ダン自身が愛されて生き残れるとは思っていないのである。愛は、自我が切り離されて存在することに対する脅威を与えるものとして理解（だから、『無差別』の中でダンは一切に単純になりたくて「だから誠実でない」どんな女でも愛することができると告白する）されるのである。しかし、矛盾するのだが、ダンには愛されたいとも思うのである。歪んだ仕方である。その詩は愛を主張している。しばしば、死を思ったり未来についての理に基づかずに疑うことで、ダンには成就した愛を夢見することを断念してしまう。成就それ自体はある種の死なのである。愛は「消耗する」そして「朽ちる」ことを意味する。すなわち、愛は命を「すり切れ」させる。この個人的な傍さの感覚がその詩を不安にし、基本的な優柔不断と関係ありとしてしまう。それで、順番に、私たちは気紛れや移り気について時折りダンが繰り返す心配事を思い出すことになる。女性への態度は、慎重であり恨んでもいるという極端なまでに複雑である。信じられないのに懇願している。全ての女性のように、この詩の女性は男性の欲と涙で作り出された様々の要素を含んだ存在である。彼女は死に至るのに生き続けている。人を食らう女王と母親を兼ね備えた存在であり、またその詩の命令

調が含んでいるようにその男性が男性らしさを高めるために支配しなければならぬ対象物なのである。換言すれば、その詩は溢れるばかりの反対の思慕の念であり、その上に合理性の殻がはめ込まれていたのである。その殻は私たちが当惑している内部を見るのにじやまにならない。反対に、その詩の外側を血迷って合理化することは、広がっていく心配事の症状そのものであり、その最後の行の惨めで絶望的で反抗的な叫びで頂点に達する。その最後の行は言葉が言葉にならないところに来るだけ近づいているからである。

私が『禁止』とダンが説教の中の無神論の扱い方との間で考える比較は、今ではもつと明確になるだろうと願っている。説教と詩の両方の中で合理的な一面が採用される。両方の中で、上手く含んでいる情緒には不適當であると分かる。しかし、説教集の中で崩壊していく面の背後で理性がより良くその務めに耐えるであろう単純で憤慨した望みを私たちは認めるだけである。対照的に、その詩の中で理性の失敗は全て活気づける複雑な状況の源である。自分の懐疑主義によってダンは理性を指し貫き、不明瞭で混乱した情熱の中でその基盤を示してきたのである。詩の中で通例であるように、ダンは質的で個人的で劇的である非論理的な目的のために——量的で普遍的で単調な——論理を適応させている。

理性の危機は先延ばしされた事柄であったし、信仰に反対である理性の効力についての討論は十七世紀を通して行われてきた。その討論は、結局のところ最も偉大な詩『失樂園』の知的中核部分を生むこととなった。しかし、十七世紀が経過して、ベーコンの帰納法変革が契機を捉えるにつれて、理性の威光は高められた。その主張に対する軽蔑は徐々に興味のない奇抜さだけになった。ダンの詩の創造的な懐疑主義が起こったというか、神に到達する道具としての理性は致命的にも信用されていなかった

た時の短い合間に起こることができて、自然への鍵としての理性はまだそれほど試みられなかったので手に余って捨て去られてしまうことになる。ダンはその捨て去っているのである。この短い期間に、大雑把にカルヴァン（一五六四年没）とガリレオ（一五六四年出）とが共に優勢であった期間であるが、人間の理性は並外れた程度に取り組むべき外側の対象物を奪われた。理性は結果的には内面化し、人間の心を探究したりシェイクスピアの劇やモンテーニュの『エッセー』のような想像的で思索的な傑作を産み出した。ダンがこのように探究する仕方は、ダン自身がスコラ哲学の神学者たちの執拗で繊細な議論好きと同化してしまつたという事実から生まれたのである。懐疑主義によつて、このことはその最初の目的を失つてしまつた。そこでダンは自分の「謎で、当惑させ、迷路のような魂」<sup>⑤</sup>の矛盾を説明するためにそれを修正した。

人間の推理力についてのダンの自信の無い意見とはいへ、追加する価値はあるのだが、ダンを決して人間を取るに足りないものと考えたことはなかつた。このことを私たちが捉えることは難しい。なぜなら、私たちはダンの優れた知性（優秀とは脳の重さに等しい）に直接に人間の卓越性を結びつけがちだからである。しかし、ダンは、知性を信用していなかつたけれど、人類の普遍的な重要さを進んで誇大妄想的な見方に思えるにちがいないものを持つていた。典型的に、人間が「共に空（くう）より軽い」という詩編からの聖句で説教をするとき、ダンが憤然としてそれに異議を唱えた。聖書が述べていることは意味が通じない、とダンが論じている。人間は決して空（くう）ではなく、「神の目に入れても痛くないもの」である。人間は「全てであり、世界の全部ではなく、世界そのものである。そこに世界がある理由がある。」<sup>⑥</sup>「丸い世界全ては、人間にとつて丸い葉にすぎない」と、ダンがエドワード・ハーバード卿<sup>⑦</sup>に伝えている。『祈祷集』の中で、ダンが創造の残りの部分

に関連して人間の大きさを称える賛辞へと乗り出す。人間を小宇宙と呼ぶことは侮辱である。人間は小さい世界ではなく、巨大な世界であり、たくさんの被造物と共に集まつている。

我々被造物は我々の思い、巨人に生まれる被造物。だから、東から西に、地上から天上へ達するのである。全ての海と陸を跨いで越すだけでなく、直ちに太陽と天空を測量してしまう。私のくさぐさの思いは全てに達して、全てを把握してしまう。不可解な神秘。すなわち、私は狭い獄の中で、病の床で、至るところで、それらの創造者。私の被造物のどんなものも太陽と共にあり、太陽の向こうに、太陽に追いつき、一步調、一步、いたるところで太陽を越えて行く。<sup>⑧</sup>

ダンの思想についての考えの中に明らかに矛盾があることに気が付く。一方で、私たちは人類の全ての結集した知性が一匹の蟻を理解することさえできないことをダンが指摘しているのを見てきた。一番単純な事実、なぜ草は緑色なのか、なぜ血は赤いのかというようなことは人間の理解を越えている。しかし、ここでダンが人間の思想の際限ない広がりについての狂詩曲を書いているのである。その不一致が明らかになるのは、私たちがどのようにしてダンが『祈祷書』からの文章の中に思想を感じるかを観察するときである。それは分析的あるいは認識に基づいた過程として示されているのではなく、そのスピードや範囲によつて区別される誘導弾として示めされる。蟻を理解するために必要なその種の思想は、このような言葉では特徴を言い表すことはできないのである。現代の私たちはダンが思想ではなく、想像力を称賛する人間の能力と呼ぶべきである。十七世紀が進むにつれて、そのことは正にどのよう

事柄が見られるようになったかである。カウリーが主張したのは、『想像』だったからこそ、遠くの旅に心を向けたのである。

人間の足跡も獣の蹄も無いところに  
その道が作られた。

ホッブズは、『ダヴェナントに対する答え』の中で思想が「一つのインドからもう一つのインドへ飛んで行くように見える」とき、実際には頭の中に留まっていると冷淡に述べた。「彼女の素晴らしい俊敏さは、写し取る心象風景が慎重に命じたり、完全に、記憶の中に登録されるように」。(8) ホッブズは新合理主義時代に属しているが、その結果として理性の危機が起こった。理解するのに余念がなく、彼は想像することを馬鹿にする。危機の間中、書いているダンを別にすれば、理解は不可能であると認められている。だから、そこに向けているその種の思想は役に立たない。想像力は『祈祷集』からの文章の中で思想と同義語であり、それを使えば人間は宇宙を征服することができる。そのことで私たちは何故理性の危機が偉大な無神論者たちだけでなく偉大な詩人たちをも産み出したのかを見ることができるようになったのである。

## 原注

- (1) *Elegies*, 43.
- (2) On Ramus see Walter J. Ong, *Ramus, Method and the Decay of Dialogue* (Cambridge, Mass., 1958).
- (3) Nicholas Cusanus, *Of Learned Ignorance*, Fr G. Heron (1954).
- (4) Cornelius Agrippa, *The Vanity of Arts and Sciences* (1684), 7.328-30.
- (5) Raleigh, *Works* (Oxford, 1829), viii, 556.
- (6) See L. I. Bredvold, 'The Religious Thoughts of John Donne in Relation to Medieval and Later Traditions', in *Studies in Shakespeare, Milton and Donne by Members of the English Department of the University of Michigan* (New York, 1925), 193-232; and 'The Naturalism of Donne in Relation to some Renaissance Traditions', *JEGP* xxii (1923), 471-502. On scepticism see Margaret L. Wiley, *The Subtle Knot: Creative Scepticism in Seventeenth Century England* (1952); Herschel Baker, *The Wars of Truth*, (New York, 1952); R.H. Popkin, *The History of Scepticism from Erasmus to Descartes* (Assen, 1964).
- (7) *Satires*, 46.
- (8) *Satires*, 191.
- (9) Descartes, *Discourse on Method and Other Writings*, trans. A. Wollaston (Penguin edn, 1960), 145.
- (10) Nietzsche, *Human, All too Human* (1878), sect. 19.
- (11) *Sermons* vii, 260.
- (12) *Satires*, 13.
- (13) Wiley, op. cit., 78.
- (14) *Epithalamions*, 48-9.
- (15) See Michael McCaules, 'Paradox in Donne', *Studies in the Renaissance*

- 13 (1966), 266-87.
- (16) *Elegies*, 34, 157.
- (17) Quoted in Baker, op.cit., 142.
- (18) Calvin, *Institutes*, II, i and ii.
- (19) R.Baxter, 'The Saints Everlasting Rest', iv, 2; Baker, op. cit., 211.
- (20) Grotius, *De Jure Belli ac Pacis*, sect. 16.
- (21) *Sermons* ix, 390; vii, 360-1.
- (22) *Sermons* vi, 214.
- (23) *Sermons* vi, 184, and iii, 87.
- (24) *Devotions*. 25 (Expostulation IV).
- (25) *Divine Poems*, II.
- (26) *Sermons* ix, 256; ii, 308.
- (27) *Sermons* viii, 282; ii, 319, 334.
- (28) *Sermons* v, 53.
- (29) *Sermons* ix, 160.
- (30) *Divine Poems*, 8.
- (31) *Sermons* ii, 323; *Essays in Divinity*, 87.
- (32) *Sermons* vi, 188.
- (33) *Sermons* viii, 370.
- (34) *Sermons* i, 170, 175.
- (35) *Satires*, 31.
- (36) *Essays in divinity*, 20-2.
- (37) *Sermons* v *Essays* v, 298, 47.
- (38) *Essays in Divinity*, 13.
- (39) *Divine Poems*, 19.
- (40) *Sermons* iii, 57.
- (41) *Satires*, 90.
- (42) *Epithalamions*, 63-4.
- (43) *Sermons* iii, 359.
- (44) J.A.Comenius, *The Great Didactic*, trans. M. W. Keatinge (2nd edn., 1910), 41.
- (45) *Essays in Divinity*, 56.
- (46) *Essays in Divinity*, 14.
- (47) *Epithalamions*, 49.
- (48) *Epithalamions*, 49.
- (49) Raleigh, *Works* (Oxford, 1829), ii, xlvi.
- (50) See D.C. Allen, JEGP 42 (1943), 322-42.
- (51) *Epithalamions*, 49.
- (52) *Epithalamions*, 37.
- (53) Foster Watson, *The Beginnings of the Teaching of Modern Subjects in England* (1909), 375-83.
- (54) *Du Bartas His Divine Weekes and Workes*, trans. Joshua Sylvester (1605), Week 1 Day 4, lines 155-9, 182-3.
- (55) *satires*, 96.
- (56) Gosse i, 219.
- (57) *Ignatius*, 17-19.
- (58) *Epithalamions*, 17.
- (59) *The Life and Letters of Sir Henry Wotton*, ed. Logan Pearsall Smith (Oxford, 1907), i, 486-7.
- (60) *Elegies*, 62.
- (61) C.M. Coffin, *John Donne and the New Philosophy* (New York, 1937), 123-4.

『ジョン・ダン入門』——背教と野心の詩人——

- (2) *Satires*, 105, lines 13-14.
- (3) *Sermons* iii, 210.
- (4) Simpson, 124-5.
- (5) *Sermons* ix, 330, 305.
- (6) *Sermons* vii, 396.
- (7) T.S.Eliot, 'Donne in Our Time' in *A Garland for John Donne*, ed. T.J. Spencer (Cambridge, Mass. 1931), 3-19.
- (8) See G.T.Buckley, *Atheism in the English Renaissance*, Chicago, 1932).
- (9) Bald, 61.
- (10) *Sermons* iv, 168; see Ramsay, 148 f.
- (11) *Sermons* ix, 134; viii, 225.
- (12) *Sermons* iv, 167.
- (13) *Sermons* viii, 332-3; also iii, 257; v, 388.
- (14) *Elegies*, 39-40.
- (15) *Sermons* viii, 332.
- (16) *Sermons* vi, 297-8.
- (17) *Satires*, 81.
- (18) *Devotions*, 23 (Meditation IV).
- (19) See Geoffrey Bullough, *Mirrors of Minds: Changing Psychological Beliefs in English Poetry* (1962), 45-6.